

# CONDITIO HUMANA

—Sonus et Verbum—

(*De Doctrina Christiana*, I, 12)

加 藤 武

## 序 論

アウグスティヌスの思想において、音声と内なることばは、どのような関係をもつのであろうか。これをまず問わなければならない。さらにこのころにおいて聞くとはなにか、を尋ねることにしよう。これを要するに、声を聞くとはなにか、をアウグスティヌスにおいて探ることが、筆者の意図するところである。

アウグスティヌスは *De Doctrina Christiana* I, 12 (『キリスト教の教え』；以下『教え』と略記する) において声の問題に触れている。けれども、それはきわめて圧縮した含蓄のある表現をとり、わずかに数行述べるのみである。

そこでまず、この文脈をときほぐし、成立史的な展開を遠近法的に辿ることによりその真意を改めて見定めなければならない。この『教え』I, 12という個所を選んだのは、それが中期の言語論を代表する、もっとも重要なテキストに属するからであり、とりわけ『告白』の成立直前の言語理論の断面を鮮やかに示すからである(第1章)。

次に、これを晩年の『三位一体論』の末尾における一節と比べよう(第2章)。

最後に『告白』におけるミラノとオスティアの—いわゆる神秘経験かどうかを問う視点からばかり論じられがちであったと思われる—経験を、ことばの経験としてとらえ直し、とくにこれを、声を聞く、という視点から見るとどうなるか、これを吟味したい。特に筆者は、1990年秋の中世哲学会の公開講演において、加藤信朗<sup>1)</sup>によって喚起された三つの興味深い問題のうちのひとつ、「このころにおいて聞くとはなにか」に啓発された。そこでそれに関

連してささやかな意見を述べよう (第3章)。

### 第1章 音声と内なることば

アウグスティヌスは、はじめは音声と内なることばの関係を切り離してとらえていた<sup>2)</sup>。しかし次第に両者の関係を緊密に結び付いたものとしてとらえるにいたる。

筆者は1989年秋の中世哲学会のシンポジウムにおいて、この問題を『説教』288にもとづいて問うた<sup>3)</sup>。ここでは *De Doctrina Christiana* を中心に探ることとする。序論において述べたように、簡潔な表現に罩められた意図を取り出すために、その前後に書かれたテキスト群を年代を追って吟味することをおして、その視点の推移に目を注ぎつつ辿ることを試みよう<sup>4)</sup>。

#### 1 『信仰と信条』3, 3-4

393年10月、アフリカ教会会議がヒッポで開催された。この会議において司祭に就任なお日の浅いアウグスティヌスが、信条の教義について講解をおこなっており、そこにはすでに言葉の意味をめぐる鋭い洞察が見いだされる。それは単なる解説の域をはるかに越える。アウグスティヌスは、変化をまぬかれない人間のことばと変わることのない神の言葉との比較を試みて、次のように述べている。

「でもコトバをわれわれの言葉と同じもののようにってはなりません。われわれの言葉は、音声と口から発し、空気を震わせ、やがて、消えてゆきます。それは音声がかかっている間しか、とどまらないのです。でもかのコトバは変化をこうむることなくとどまります<sup>5)</sup>」

(『信仰と信条』3, 3)

ここで注目すべきはコトバの超越的な性格が支配的であることである。アウグスティヌスは続いて『知恵の書』7, 27を引いている。

「〔知恵は〕それ自身にとどまり、万物を新しくする<sup>6)</sup>」

アウグスティヌスは、さらに進んで、われわれの言語による表現と、キリストのコトバとしてのあらわれ、の間に存在する類似と相違とに着目する。

では、類似はなにゆえに存在するのであろうか。われわれは聞き手にあることをそのしるしによって知らせる。同様に、父なる神はその意思を神の子をとおしてわれわれに啓示した。では、人の言葉と神のコトバとの相違は、どこにあるのであろうか。われわれは音声を発する (facimus). けれどもそれを生むことはない (non gignimus). しかるに神はコトバを生む。われわれのコミュニケーションが不完全であって、他者の考えを十分に理解し得ない理由がここにある。アウグスティヌスは次のように説いている。

「われわれは、音声としてひびくことばを作る (発する) が、生み出すことがない<sup>7)</sup>」

(『信仰と信条』3, 4)

では、ある、と、ない、との、両義性のあいだを揺れ動くことを免れる、まことのことばは、所詮は有限なわれわれには手の届かぬ高峰の花でしかないのであろうか。「まことのことばは失われ」と、『春と修羅』において歌ったかの詩人の哀切な嘆きを、われわれもまたついにまぬかれないのか。まことの言葉との接点はどこにあるのか。

## 2 『キリスト教の教え』I, 12

『教え』I, 12は、おそらく『信仰と信条』が記されてから三年ほど後に書かれたと思われる。ここには音声とところのことばの統合にむかって、『信仰と信条』の場合に比べて一段の前進がとげられ、アウグスティヌスは人間の言語との比較をとおして受肉の秘義に逼っている。

「知恵ご自身が来られたのは、言葉が肉となって、われわれの間に宿られたからでないとしたら、なぜであらうか。われわれが話すとき、ここにいただくことが、肉の耳をとおして聞き手のところに滑りこむ。すると、ここにいただくことばが音声となって、発語とよばれる。けれども、われわれが考えたことがこの音声に変わるのでなく、考えたことは、そのままそっくりとどまり、声の形をとり、声によって耳に入りこむが、声になるという変化によって、すこしも損なわれることがない。ちょうどそのように変わることはない神のコトバは、肉となって、われわれの

間に宿ったのである<sup>9)</sup>。

(『教え』I, 12)

ここで第一に注意すべきは、音声とことばの関係が、さきに掲げた『信仰と信条』の場合よりもはるかに緊密に結びつけられている、ということである。「音声のかたちを……とり」(formam uocis ……assumit)という言い回しが、キリストの二つの本性の一致と下降を明瞭に示すピリピ書 2, 6—12 からとられたことは推測に難くない。そこではこういわれている。

「キリストは神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事であるとは思わず、かえっておのれを空しうして、僕のかたちをとり、人間のすがたになられた<sup>9)</sup>」。

このかたち (forma) という表現はペルソナ (persona) という表現とはほぼ等しい。『説教』288, 4 (401) において言っている。

「ヨハネはひそかに声の形をとったのである<sup>10)</sup>」。

けれども優れた古典学者のドゥローブナー (R.Drobner)<sup>11)</sup>によると、forma と persona のあいだに微妙な相違がある。彼は「すでに、ここに、解釈学的な用語から形而上学的な用語への転換がたしかに認められる」と言う。この指摘は傾聴に値する。けれどもここではまず音声とことばとの緊密な関係をいかに苦心して言い表そうとしているかに注目しよう。先に見た『信仰と信条』における両者の比較的緩やかな関係を思いおこすならば、『教え』においてアウグスティヌスの言語論 (狭義の言語哲学と区別して言語の哲学の意味) が、いかに重大な転換期にさしかかっていることに気付くであろう。

ここで第二に注意すべきは、「われわれがここにいただくことば」(verbum quod gestamus) が音声になる、といわれ、音声がことばの中のことばとの係わりにおいてとりあげられていることである。これが『弁証論』(De Dialectica) など初期の思想に遡るだけでなく、やがて『三位一体論』へと展開することを考慮にいれるとき<sup>12)</sup>、さりげなく述べられたこの一節の重さをあらためて認識するものである。

第三に、さきの『信仰と信条』2, 3と同じように、発語 (elocutio) の場面

での言語現象が、incarnatio との係わりのなかでとらえられている点に目を向けよう。さきにはロゴスの超越性に力点がおかれていたけれども、ここでは下降し、内在する面に、transcendentia よりも praesentia に力点がおかれている。

中期のアウグスティヌスは、音声とことばとの統一の側面に関心を寄せている。それは396年の『説教』(sermo) 120, 2 に始まり、412年から416年の間におこなわれた『説教』185にいたるまで繰り返し述べられ、基調は終始変わらない。年代順<sup>13)</sup>に並べると次のようになる。

- 1 『説教』120, 2 396年
- 2 『説教』28, 5 397年
- 3 『説教』225, 3 400—405年
- 4 『説教』288, 3 401年
- 5 『説教』187, 3 411—412年
- 6 『説教』185, 1 412—416年

もっとも鮮やかな表現は『説教』288にみられるが、それについては既に論じた。音声とことばとの強い結び付きを、アウグスティヌスは乗り物の比喻をもって繰り返し語っている<sup>14)</sup>。ここではそのうちのひとつ、『ヨハネ伝講解』37, 4を紹介しよう。

「『コトバは神のもとにあった。』おお人よ。コトバがあなたのところのなかにある時、音声と、あなたのところのなかにあることばとは別のものです。それはことばが私のところに降りてきて、いわば乗り物を捜すのに似ています。だから〔ことば〕は音声を受け取ります (assumit)。自分をいわば乗り物 (vehiculum) に乗せます。空気の中を走って、私のところにきます。あなたのところには戻りません。でも音声は私の元に来て、あなたから離れるでしょうし、私のところには留まりません。… …あなたの思いは私の耳を通じて、わたしのところへ降りてきました。なかだち (medius) の役目をする音声は空中を走り抜けました<sup>15)</sup>」。

ここで「おお人よ」(o homo)、といわれていることを見落としてはならな

い、『説教』120, 2でも言う。

「私は人として、また人であるあなた方に、話しています。弱い私が私よりも弱い皆様方に話すのです<sup>16a)</sup>」。

さらにそのすこし先(『説教』120, 3)でも言う。

「人の弱さよ (*humana infirmitas*)<sup>16b)</sup>」。

人が弱いから、*incarnatio* を必要としたのである。『教え』の序論6で弱い人間の条件 *conditio humana* が天使の歌にも勝る人間の尊厳を示すものとして高く評価されていたことをあらためて想起する。

「たしかになにごとも天使によって遂行されることができた筈である。けれども、もしも神が人々に神のコトバを与えようと望んでおられないように見えるとしたら、人間の尊厳 *conditio humana* は軽んぜられることになる<sup>17)</sup>」。

しかしそこで聖書解釈の必要について述べられていたのに対して、『教え』I, 6ではいっそう言語論の地平に立ち、音声に密着した角度から語られる<sup>18)</sup>。

「それにもかかわらず、神について何一つふさわしいことを述べることができないのに、神は人間の声によって神に仕えることをお認めになり、われわれの言葉でもってわれわれが神を称えて歓喜することを望まれた。まさにこういう理由で、神はデウスと呼ばれることを許された。このデウスという二つの音節の響きで神自身が真の本質において認識されるのではない。しかしそれでもこの音声がラテン語を使うすべての人々の耳を打つとき、かれらを動かしている。あるもっとも卓越したしかも死ぬことのない存在を思索させるのである<sup>19)</sup>」。

さらに乗り物の比喩に注目しよう。声はここで伝達の「なかだち」<sup>20)</sup>としての中間的な存在であり「乗り物」(*uehiculum*)であるとされる。その描写が、「乗り物」に乗ってゼフェュロスの柔らかい胸に比せられる大空を駆けぬけるという、終生聖書とともに座右の書である『アエネイス』とともにおそらく親しんだ文学作品の一つであったアプレイウスの『黄金のろば』の一節<sup>21)</sup>を思わせる文学的・神話的形象に富むことは興味深い。

## 第2章 言語の境界

1. 音声とことばは緊密な結び付きをもつ。それでは精神的なことば (*verbum quod vere spiritualiter dicitur*) が、そっくり物的な音声 (*vox corporis*) に変化するのであろうか。これが一つ。次にいったい、ことばといっても、どのレベルで言われているのか。日常言語のレベルにおいてか。それとも超越的な高度の言語のレベルにおいてか。この二つの問いを第二章でとりあげよう。中期において、一貫して音声とことばとの緊密な結合の側面に力点が置かれて来た。これに対して『三位一体論』XV, 11, 20においては音声とことばとの差異の側面に光があてられる。アウグスティヌスは言う。

「このようにして、たしかにわれわれのことば (*verbum*) は、なんらかの仕方で、物的な音声 (*vox...corporis*) になります (*fit*)。声を引き受けることによって、(*assumendo eam*) 人々の感覚に現れる (*manifestaretur*) ためです。……もっともわれわれの言葉が声になると言っても、なにもそれが声が変わる (*mutatur*) わけではありません。言葉が声が変わるなど、とんでもない話です<sup>22)</sup>」。

(『三位一体論』XV, 11, 20)

たしかに、これまでことばと音声の結び付きがいかに強調されていたとはいえ、ことばが音声に変化するなどと、述べられたことは一度もないのである。たとえば『説教』187, 3において言う。

「沈黙のうちにそれ以前に響いていたものが声にだされ、さらにこのようにして声になったからといって、声に変化するものではありません<sup>23)</sup>」。

優れた言語論的著作である『声字実相義』において空海<sup>24)</sup>はすでに声と意味の一体を説いた。しかしアウグスティヌスは両者の緊密な関係をいうと同時に差異を指摘する。

2. それでは、ことばというとき、どのレベルで語られていたのか。それを顧みてみよう。それは日常言語のレベルには属しない、といわれる。『ヨハネ伝講解』1, 10でアウグスティヌスは言う。

「ところで、コトバ (ハジメニコトバガアッタ) を聞くときあたかもく

だらなことを思い浮かべていると思っはなりません。毎日あなたが耳にしているような〔日常的な〕言語などと思わないでください<sup>25)</sup>。

それではとりつくしまがないではないか、という反論が出るかもしれない。アウグスティヌスは日常言語のレベルを手がかりにする用意を忘れない。『説教』120, 3でアウグスティヌスは述べている。

「われわれは人です。そして人々に話しているのです。われわれは声の音声を出しているのです。人の耳に、われわれの声の音声を発します。そしてわれわれの声の音声をとおして、なんらかの意味 (intellectus) を、耳からここに伝えます。……でもこんなことが分からないようでは、かの神秘にたいしてはどうなりますか<sup>26)</sup>」。

ここに日常言語をふまえて、さらにその彼方に、神秘的な言語の層が横たわっていることがうかがわれ、むしろそのような高次の言語の高峰へと、登攀を促している。とはいえこれは洗礼を受ける人を前にして、平易さをよくよく配慮してなされた説教であった。では恐らくそのような顧慮を要しない『三位一体論』XV, 11, 20ではどうであろうか。

「でもこの音声は通り過ぎてゆかなければなりません。それは人間の言葉がかの〔神の〕コトバに到達するためです。なんらか人の言葉の相似性によって、あたかも謎めいてではあるにしても、なにかしら神のコトバが見られるためです<sup>27)</sup>」。

では、聖書という「テキストのことば」の場合はどうであろうか。アウグスティヌスは続けて言う。

「神のコトバは、多くの異なる国語の音声において、人の心と口をとおして蒔かれています<sup>28)</sup>」。

神はコトバであった。⇒すべてのものはこれ (コトバ) によってなった⇒コトバは肉となった。⇒知恵の泉、それはいと高きところにおける神のコトバ。アウグスティヌスは、聖書の四箇の短かいテキスト<sup>29)</sup>を、リレーのようにバトンを引き次ぎ、回り燈籠が周るように、円環を描いて神のコトバの意味が深まってゆく仕方で、たくみに引用する。神のコトバの主題がそこから

引き出される。聖書というテキストは、あくまで人間の言葉で語られているが、それを神のコトバとして受け取る解釈学的な作業が営まれている。ここから一挙に高次のことばのレベルに移る。『三位一体論』 VX, 20 の、長文とはいえきわめて大切な〈テキスト〉を引用しよう。

「だから、あの人間のことば、理性的動物のあのことば、に到達しなければなりません。それは神から生まれたのでなく、神によって作られた神の似姿のことばです。それは音声において発せられたものでなく、音声との類似において思い浮かべられたものでもないのです。音声との類似は、あらゆる言語に、かならずついてまわるものですが、このことばは、音声が指示するすべてのしるしに先立ちます。この知が、このころのなかで (intus) ありのままに (sicuti est), かたられるとき、それはこころのなかにとどまっている知から生まれます。思索が見るものは知が見るものにそっくりです。……だからかのノチチアにおいてあるものが、ことばにおいてもあるとき、それはまことのことばです……ここからつぎのことがみとめられます (agnoscitur). ある, ある. ない, ない. (Est, est. Non, non.)<sup>30)</sup>」。

さきにわれわれは『信仰と信条』3, 4において、

「われわれは、音声としてひびくことばを作る (発する) が、生み出すことがない<sup>31)</sup>」。

と述べていたことを想起する。つまり生み出せないという絶望がそこでは支配的であった。けれどもここでは、つくられたイマゴ・デイとしての人間の言葉のなかに Est, est; Non, non. という「ことば」が生まれ, ありのままに、あるをあるとして語るときにある種の神のコトバとの相似性が見られる, という。

「このようにして、作られた似姿の相等性は、それによって、子なる神があらゆる点で、父なる神に等しいといわれる、生まれた似姿の相似性に、あたうかぎり、近づくのです<sup>32)</sup>」

アウグスティヌスはここで、作られた似姿の相似性と生まれた似姿の相似

性の距離を限りなく縮めることを目指しており、いかにもその可能性を信じきっているように見える。

「それは、なんらか、人のことばの相似性によって、あたかも、謎めいてであるにせよ、なんらか神のコトバが見られるようになるためである<sup>33)</sup>」。

（『三位一体論』 XV, 20）

### 第3章 ころろに聞かれることばとは

1. それでは「神のコトバが見られる」とはいかなる事態をさすのか、それとともに「ある」とか「ない」とかは、なにを意味するのか。「ある」と「ない」ということばが生まれる場面は二通りある。第一は、見る (contemplatio) 場面であり、第二は、おこなう、あるいは、はたらく (operatio) 場面である。第一の見る (contemplatio) 場面は、第二章の末尾で引用した。そこでは次の様にいわれていた。

「この知 (scientia) が、ころろのなかで (intus) ありのままに (sicuti est) 語られるとき、それはころろのなかにとどまっている知から生まれます。思いが見るものは、知が見るものとそっくりです<sup>34)</sup>」。

（『三位一体論』 XV, 20）

これにたいして、第二のはたらく (operatio) 場面については、

「ここでもまことのことばがあるとき、まことのことばはよい行為の始めです。そしてよい行為をおこなう知からことばが生まれるとき、そのことばはまことです。だから、ここでも Est, est; Non, non. ということばが使われるのです<sup>35)</sup>」

といわれる、ここにも Est, est; Non, non. ということばがあらわれる<sup>36)</sup>。続けていう。

「そうでなければ、否である。でない、こうした言葉は虚偽になるでしょう。それはマコトではありません。そこからは正しいおこないでなく、罪が生まれます<sup>37)</sup>」。

だから、Est, est; Non, non. は存在と倫理的意志の二つの領域にまたがる。

たしかにドゥッフロウ<sup>38)</sup>が指摘するように、「ここからして、応答という現象が見えてくる」。ある、と、ない、とはだから、しかり、と、いな、とを同時に含意する両義性をもつ。日本語でこれをいかに訳すか、至難のわざと言ふほかない。それは対話的な世界の言語である。存在理解だけでは解消されない。なるほどアナログアの論理としては弱いかもしれない。加藤信朗<sup>39)</sup>はいみじくも「アナログアをこのように用いるとき、アナログアは必然的に敗れるのです」という。similitudo の橋は dissimilitudo のめくるめく深淵にかけられている。なるほどそれはいかにも脆弱な構造をもっている。だが揺れる釣橋を渡りつつひとは彼方からの呼びかけを聞かないであろうか。そのとき、ひとはマコトを語る。

2. 次に、Est, est; Non, non. の帯びる存在論的な意味を探ろう。それをすぐれて示唆するテキストがある。それは『説教』7, 7であり、397年か、407年か、成立年代は争われる。仮に397年だとすると、『告白』執筆の年代に接近し興味深い。そこではモーセのエクスタシスの経験が述べられている。

「ある (Esse) とは変化しないものの名前です。……『ワタシハアリアルモノ』とはわたしは永遠であるということではなくて、なんでしょうか。……だからこれが永遠という名前をもつものであるとしたら、あわれみという名前をもつことはもっともなことです。『ワタシハアブラハムノ神、イサクノ神、ヤコブノ神デアル』。かの名前は、それ自身について、この名前はわれわれのためなのです<sup>40)</sup>」。

これがデカルトのコギトーのようなモノログとことなり、ディアログの性格をもつことは見やすい道理ではなからうか。

それではこのような Est, est; Non, non. が語られるのはどのような場面においてであろうか。それを『説教』7, 7をとおして見よう。

「というのはこの、ある、まことにある、とはなにかを理解した人は、なんらかまことのきわみである、存在の光から、かすかな閃光を浴びただけでも、自分がいかに下方におり、はるかに離れており、まったく、似ても似つかないものであることに気がきます。わたしは入神の境地に

入った。このようにいうひとがいるように<sup>41)</sup>」。

『三位一体論』XV, 20 では、Est, est; Non, non. が連続面 *similitudo* を示すかに見えたのに、『説教』7, 7 ではむしろ非連続面 *dissimilitudo* を露呈している。さらに続けて言う。

「ところで正気に返った時、なにかをみました。それはモーセにとり大いなるものを意味しました。これはまことに、あった (*erat*) ものでした。……だから、彼が見たものでなく、かれに語り掛けてきたものに自分が等しくないことを悟ったときに、そのあるものを見ようとして、自力では燃え立つことができないかのように、彼が話していた神に言いました。『わたしにご自分を示してください』。……希望を持ちなさい。『ワタシハアブラハムノ神、イサクノ神、ヤコブノ神デアル』<sup>42)</sup>」。

ここで分かることは、存在の光の彼方に語りかけてくるものがあるということである。光を見る領域の彼方に語りかけを聞く、すなわち声を聞く領域がある。これが「こころにおいて聞く」といわれていたことが、成立する場なのではないか<sup>43)</sup>。ミラノの経験においてアウグスティヌスは見た。けれどもわれに返ったとき、声を聞くように思われ、乳を飲むことにとどまらないで、パンを食べるようになさい、とのすすめにおいて、ワレハアリテアルモノ、という言葉を知っている。いずれにしてもなぜ、「聞くように思われた」(*et audiui, sicut auditur in corde*) と、いかにも、もってまわった、しかも意図的にぼかした言い回しをしたのであろうか。しかし、聞いたといえ、一種の異常な心理現象としてしかうけとられかねない。それを避けて物語ろうとすると、このような両義的な表現に訴えざるをえなくなるのではないか。それなら、オスティアの経験の場合はどうか。これまたどこをとっても、そっくりそのまま、プロティノス的な、見るに傾斜する表現に出合う。けれども経験の反省をのべるくだけで。

「そして、これらによってでなく、ご自身自らがご自身によって語る (*loquitur*) とき、……それはまさしく主の喜びに入れ、といわれるときではないでしょうか<sup>44)</sup>」

と述べていることは、神秘経験をことばの経験<sup>45)</sup>として、アウグスティヌスみずから解釈していたことを示している。それは見る経験である以上に、声を聞く経験としてもとらえることができるであろう。これらの経験が、Est, est; Non, non. を見いだす言語経験と対応することは、もはやあきらかではなからうか。

このような光の彼方に声を聞く経験は、どこか日常言語と隔離された特権的な神秘言語の聖域においてでなく、あるとか、ないとか、という日々の言語活動のさなかにおいて起きている。しかもその手垢によごれ、摩滅し、ズレをもった言葉がそのまま、あるとき瑤光を浴びて煌くのである。

## 結 論

アウグスティヌスは、音と意味のかなたにある声になみなみでない関心を寄せた。それは *incarnatio* の要請であった。さらに日常言語と離れない境位において神秘言語の領域をとらえていた。そこでも声が大きな意味を開示したのである。『教え』の一節は、われわれにもう一度声の問題を考えることを促している。

## 註

- 1) 加藤信朗「アウグスティヌスの三位一体論」『中世思想研究』, 33, 1-25頁; 特に20頁, 1991年。
- 2) Augustinus, *De Dialectica*, 5; *Sext., adv. math.* VIII, 275; *Lógos endiáthetos-prophorikós*. 水落健治は筆者の報告に対し、『デ・ディアレクティカ』のなかにすでに『クラチュロス』問題が秘められている可能性を暗示した。これはジュネットなどの通俗的な理解を越える。アウグスティヌスが『デ・ディアレクティカ』においてストア的な言語理論にとどまるのかどうか筆者も関心をつなぐものである。筆者は『アウグスティヌスの言語論』50-52頁で触れた。転向があったのか、どうか、著者問題を含めて再度論じたい。たしかに『デ・ディアレクティカ』にはアウグスティヌスの言語論の基本タームがほとんど含まれている。この不思議な! 書物をキチンとおさえておかないとそれからの議論が宙吊りになる。従って、これの文献学的調査は、避けて通ることのできない。ストアの言語論については樋笠勝士の「ストアの記号論, (1)一記号の二重性一」(神田外語大学紀要, 第二号, 1990, 99-114頁)

参看.

- 3) 拙稿「シンポジウム提題, オリゲネスとアウグスティヌスにおける声」『中世思想研究』, 31, 1989年. 今回の報告はそれの続きであり展開を意図する. 第1章は, 1991年4月に, ノートルデイム大学(米国)で催された *De Doctrina Christiana* をめぐるコロキウムでおこなった報告と一部, 重なるところがある. ヴィットゲンシュタインに触れた部分はここでは省いた.
- 4) Pintariç は 1983年に, "*Sprache u. Trinität*", Salzburg-München, 1983, pp. 94-9 において, この問題に対するアウグスティヌスの見方に, 転回があったことを指摘する. 小さい素描とはいえ, 多くのことを学んだ.
- 5) Quod tamen Verbum non sicut verba nostra debemus accipere, quae voce atque ore prolata verberato aere transeunt, nec diutius manent quam sonant. Manet enim illud Verbum incommutabiliter: ...P. L. XL, 183.
- 6) In se ipsa manens innovat omnia. Sap., vii. 27. P. L. XL, 183.
- 7) Nos quippe non gignimus sonantia verba, facimus..... P. L. XL, 183.
- 8) Quomodo venit, nisi quod uerbum caro factum est et habitauit in nobis? Sicuti cum locuimur, ut id quod animo gerimus, in audientis animum per aures carneas inlabatur, fit sonus uerbum quod corde gestamus, et locutio uocatur, nec tamen eundem sonum cogitatio nostra conuertitur, sed apud se manens integra, *formam uocis* qua se insinuet auribus, sine aliqua labe suae mutationis *adsumit*: ita uerbum dei non commutatum caro tamen factum est, ut habitaret in nobis. CCSL. 32, 13.
- 9) 新共同訳..... qui cum forma Dei esset, non rapinam arbitratus est esse aequalem Deo: sed semet ipsum exinanivit formam servi accipiens, in similitudinem hominum factus, et habitu inventus ut homo. humiliavit semet ipsum ..... Biblia Sacra Vulgata, II. 1969, Stuttgart.
- 10) Personam geret Joannes uocis in sacramento. P. L. 38, 1306.
- 11) H. R. Drobner, *Person-Exegese u. Christologie bei Augustinus zur Herkunft der Formel UNA PERSONA*, Leiden, 1986, 146.
- 12) U. Duchrow, *Sprachverständnis und Biblisches Hören bei Augustin*, Tübingen, 1965, 125. 125<sup>4</sup>..
- 13) P-P. Verbraken, *Études critiques sur les sermons authentiques de Saint Augustin*, Hague, 1976.
- 14) 『説教』120, 2; 28, 5; 『ヨハネ伝講解』37, 4.
- 15) *Verbum erat apud Deum*. Apud te ipsum, o homo, cum est in corde tuo uerbum, aliud est quam sonus; sed uerbum quod est apud te, ut transeat ad me, sonum quasi uehiculum quaerit. Assumit ergo sonum, imponit se quomodo

- in uehiculum, transcurrit aerem, uenit ad me, nec recedit a te. .... CCSL. 36, 333.
- 16<sup>a</sup>) Homo loquor, hominibus loquor. infirmus loquor, infirmioribus loquor. P. L. 38, 677.
- 16<sup>b</sup>) P. L. 38, 677.
- 17) Et poterant utique omnia per angelum fieri sed abiecta esset humana conditio, si per homines hominibus deus uerbum suum ministrare nolle uideretur. CCSL, XXXII. 4. これについては拙著『アウグスティヌスの言語論』, 1991年, 創文社, 292-294頁で論じた。
- 18) 『教え』I, 6 も声にふれており, 『教え』, I, 12 とは問題の位相を異にする重要な個所であるが, ここでは触れない。
- 19) Et tamen deus, cum de illo nihil digne dici possit, admisit humanae uocis obsequium, et uerbis nostris in laude sua gaudere nos uoluit. Nam inde est et quod dicitur deus. Non enim reuera in strepitu istarum duarum syllabarum ipse cognoscitur, sed tamen omnes latinae linguae socios, cum aures eorum sonus iste tetigerit, mouet ad cogitandem excellentissimam quandam inmortalemque naturam. CCSL. 32. 10.
- 20) Daemones medios posuit, *De Civ. Dei*. IX, 13. CCSL. XLVII, 260. 古典期には, *medius* は形容詞として用いられたが, キリスト教作家には名詞としての用法が見られる。
- 21) Apuleius, *Metamorphoses*, V, 15-16. Nec in sermone isto tantillum morata, rursum opiparis muneribus eas onustas ventoso uehiculo reddidit. Sed dum Zephyri tranquillo spiritu sublimatae domum redeunt, sic secum altercantes: Loeb Classical Library. 44, 278-280
- 22) Ita enim uerbum nostrum uox quodam modo corporis fit assumendo eam in qua manifestetur sensibus hominum. .... Et sicut uerbum nostrum fit uox nec mutatur in uocem, ita uerbum dei caro quidem factum est, sed absit ut muta retur in carnem. CCSL. L<sub>A</sub> 487.
- 23) hoc idem tamen profertur in sono, quod ante sonuerat in silentio; atque ita uerbum cum fit uox, non mutatur in uocem; P. L. 38, 1002.
- 24) 頼富本宏, 『空海』, 日本の仏典2所収, 筑摩書房, 1988年. 空海は『大日経』のサンスクリット原典個所を所有格とみるか同格とみるかの文法的な違いを手がかりに独創的な解釈をほどこす。それは解釈学的にも言語論的にも卓越した意義を担う声への接近として評価されなければならない。井筒俊彦『意味の深みへー東洋哲学の水位』第七章「意味分節理論と空海—真言仏教の言語哲学的可能性を探る—」はイスラームやユダヤ教, 中国の『周易』の言語哲学にも空海に共通する純粋シニフ

ィアンを見る壮大な眺望を描く優れた試みであり、空海の声に触れるテキストを言語哲学的にとりあげていて教えられた。しかし問題は同一面だけでなく差異面を見極めることにある。

- 25) *Noli ergo tibi quasi uile aliquid formare, cum audis Verbum, et conciere uerba quae audis quotidie,..... CCSL. 36, 6.*
- 26) *Homines sumus et nos qui loquimur, et hominibus loquimur, et sonum vocis edimus. Ad aures hominum sonum vocis nostrae perducimus, et per nostrae vocis sonum et intellectum quomodocumque per aurem in corde ponimus ..... Si autem neque hoc comprehendere uauerimus, ad illud quid sumus? P.L. 38, 677.*
- 27) *Sed transeunda sunt haec ut ad illud parueniatur hominis uerbum per cuius qualemcumque similitudinem sicut in aenigmate uideatur utcumque dei uerbum. CCSL. L<sub>A</sub> 487.*
- 28) *Et innumerabilia similiter in scripturis dicuntur de dei uerbo quod in sonis multarum diuersarumque linguarum per corda et ora disseminatur humana. CCSL. L<sub>A</sub> 487-488.*
- 29) *Deus erat uerbum. ➔ Omnia per ipsum facta sunt. ➔ Verbum caro factum est. ➔ Fons sapientiae Verbum Dei in excelsis (Eccl. 1, 5).*
- 30) *Perueniendum est ergo ad illud uerbum hominis, ad uerbum rationalis animantis, ad uerbum non de deo natae sed a deo factae imaginis dei, quod neque prolatium est in sono neque cogitatum in similitudine soni quod alicuius linguae esse necesse sit, sed quod omnia quibus significatur signa praecedat et gignitur de scientia quae manet in animo quando eadem scientia intus dicitur sicuti est. Simillima est enim uisio cogitationis uisioni scientiae. .... CCSL. L<sub>A</sub> 488.*
- 31) *Nos quippe non gignimus sonantia uerba, facimus..... P. L. XL. 185.*
- 32) *Sic accedit quantum potest ista similitudo imaginis factae ad illam similitudinem imaginis natae qua deus filius patri per omnia substantialiter similis praedicatur. CCSL. L<sub>A</sub> 488.*
- 33) *..... per cuius qualemcumque similitudinem sicut in aenigmate uideatur utcumque dei uerbum. CCSL. L<sub>A</sub> 487.*
- 34) *quando eadem scientia intus dicitur sicuti est. Simillima est enim uisio cogitationis uisioni scientiae. CCSL. L<sub>A</sub> 488.*
- 35) *Sed etiam hic cum uerum uerbum est, tunc est initium boni operis. Verum autem uerbum est cum de scientia bene operandi gignitur ut etiam ibi seruetur: Est, est; non, non, .... CCSL. L<sub>A</sub> 489.*

- 36) 1983年刊行のフランス語共同訳の注によると、このマタイ 5, 37 は、ヤコブ書 5, 12 のように、《Que votre oui soit un oui, et votre non un non; ainsi vous ne tomberez pas sous le coup du jugement.》と訳すこともできるが、《ton langage doit être si vrai que tu n'as pas besoin de serment.》, とする方が原意に忠実であるという。スラブ語エノク書 49, 1 ではそれが二重の誓いの言葉に歪小化された。教父の解釈は然りはどれでも然りであり、否はどれでも否である、とするものであった。アウグスティヌスは教父の伝統に沿いながら独自の読みを引き出している。
- 37) si non, non; alioquin mendacium erit uerbum tale, non ueritas, et inde peccatum, ..... CCSL. L<sub>A</sub> 489.
- 38) 《Damit kommt das Phänomen der Verantwortung in den Blick.》Ibid. 145.
- 39) 泉治典は存在理解への傾斜が言語理解をあやうくすると警告を発している。そのあやうさの指摘は的確である。けれども、まさに存在理解と言語理解の間に介在するあるズレこそが発語への契機となっているのではないか。泉治典、「知解をもとめる信仰—序説として—」、『アウグスティヌスからアンセルムスへ』, 1980年, 3-34頁, 創文社。関根正雄（「聖書の言語の構造」『言語, 特集—ことばと聖書』昭和47年）は、アナログアとパラドクスの相関関係の論理的構造を中村獅雄の『キリスト教哲学』の着想を評価しつつさらに旧約学の領域に展開した。泉はこの路線にある。
- 40) Esse, nomen est incommutabilitatis. ..... Quid est, Ego sum, qui sum, nisi, mutari non possum? ..... Cum ergo sit hoc nomen aeternitatis, plus est quod dignatus est habere nomen misericordiae. Ego sum Deus Abraham, et Deus et Deus Isaac, Deus Jacob. Illud in se, hoc ad nos? P. L. 38, 66.
- 41) Quis enim hoc quod est et uere est, digne intellexerit, et qualitercumque lumine ueracissime essentiae, uel strictim, sicut corruscatione afflatus fuerit; longe se uidet infra, longe remotissimum: sicut ille ait, Ego dixi in exstasi mea. P. L. 38, 66.
- 42) Assumpta enim mente vidit nescio quid, quod plus ad illum erat. Hoc erat quod uerum erat. ..... Cum ergo ad id quod dicebatur, non ad id quod videbatur, longe se imparem videret Moyses et quasi minus capacem, unde inflammatus ipso desiderio videndi quod est, dicebat Deo cum quo loquebatur, ..... P. L. 38, 66.
- 43) アウグスティヌスの言語論への解釈学的探求に最初の鍼をいれた人は、H-G. Gadamer である。 *Wahrheit und Methode*, Tübingen, 1960. 395-404. V. Warnach は注目を浴びたアウグスティヌス生誕1600年記念国際学会の報告において、こころのことばの言語的な性格を指摘した。 *Erleuchtung und Einsprechung bei Augustinus*, AM I, 429-450. しかし、こころのことばと言語のレベルの間のズレ

を見落とした。この興味深いが性急な試みへの筆者の批判は『アグスティヌスの言語論』「意味の光」29-33頁に記した。Duchrow, *Ibid.* 147 (Lorenz, *Augustin-Literatur seit Jubiläum von 1954*, Theologischer Rundschau, N.F.25, 40) Duchrow も Lorenz も Warnach に批判の集中砲火を浴びせている。

視覚の位相への過度な傾斜を修正し、声の位相に注意深く思いを凝らすべきではないか。われわれは一つの転換期に来ている。

44) ..... et loquitur ipse solus non per ea, sed per se, ..... nonne hoc est: intra in gaudium domini tui? CCSL. 27 148.

45) ことばの経験としてみる視点については、『アウグスティヌスの言語論』、特に、第二部「解釈学的視点から一経験と解釈一」(136-203頁)で詳しく語じた。